

21. 急性心筋梗塞における心ブロックの検討（下壁梗塞を中心として）

高田博之，佐藤信一，西本良博
下浦敬長，鳩貝文彦，角田興一
（県救急医療センター）

前壁梗塞86例，下壁梗塞59例，計145例の心ブロックにつき検討した。房室ブロックは前壁梗塞の5.8%，下壁梗塞の45.8%にみられ，3度房室ブロックはそれぞれ4.7%，18.6%にみられた。このうち恒久的ペースメーカを必要とした例はなかった。下壁梗塞例では，房室ブロック合併例は非合併例に比べ，ピークCPK値，死亡率ともに高い傾向を示し，又，心電図上QSパターンと房室ブロックの間には有意の相関があった。3度房室ブロックは殆んど3日以内に出現し，持続も3日以内であり，前壁梗塞に比べQRS幅も有意に短かかった。下壁梗塞に伴う心ブロックは予後が良く，殆んどが退院時には消失しており，前壁梗塞と対照的だった。

22. 永久型ペースメーカーにおける至適心拍数の検討

石川隆尉，鈴木 勝，竹内信輝
（旭中央）

マルチプログラマブル永久型ペースメーカー植込みにあける至適心拍数を検討した。対象は徐脈性不整脈の治療のためマルチプログラマブル永久型ペースメーカーの植込みを行なった10例，内訳は男性4例，女性6例である。方法は，大腿静脈よりスワンガンツカテーテルを肺動脈に挿入，鎖骨下静脈より一時型ペースメーカーカテーテルを右室に設置，自己リズム及び50~90/minのペースメーカー施行時における次の如き循環動態の諸指標を求めた。心拍数，血圧，肺動脈圧，肺動脈楔入圧（PCWP），中心静脈圧，心拍出量及び心係数（CI），末梢血管抵抗，肺血管抵抗等である。これらのうち原則としてCIとPCWPにより至適ペースメーカーレートを検討した。次にいくつか症例を掲げる。症例1) 65歳の女性，洞性徐脈。主訴は立ちくらみ様の目まいで，心電図では洞調律であるが，夜間から早朝にかけレートは37/minにまで下がっている。50~80/minのレートでペースメーカーすると，レートの増加につれCIは徐々に増加したが，PCWPは65/minまでは減少，70/minにて急増したため，65/minを永久型ペースメーカーの植込みレートとした。検査施行時の自己リズムのレートは44/minであったが，PCWP高値であり，自己リズムによる血行動態が良好であるとする積極的データを得られなかったためヒステリ

シスは0とした。症例2) 50歳の男性，徐脈頻脈症候群。心電図では，40/min台の洞性徐脈を基本に，頻拍性心房細動，各種期外収縮が多発していた。頻拍性不整脈に対し薬物療法を施行しつつ，ペースメーカーによる血行動態を検討したが，植込みレートは65/minに設定した。検査施行時の自己レートは53/minであり，この時の血行動態が良好であったため120msecのヒステリシスを加えた。（結果）10例の植込みレートは，50/minが1例，60/minが2例，65/minが4例，70/minが3例であった。65/minの2例は120msecのヒステリシスを加えた。（結語）徐脈性不整脈の患者に対し各種レートでペースメーカーを行ない，CI，PCWP等の血行動態をモニターした。この方法で求めた至適ペースメーカーレートは70/minとは限らなかった。ペースメーカーレートにより，CIが変動する例，PCWPが変動する例など，レートに対する反応は様々であった。ペースメーカーによる血行動態の測定は永久型ペースメーカーの適応決定に有用であると考えられた。自己リズムによる血行動態が良好であると確認できた例では，ヒステリシス決定の参考となった。

23. 心脈管薬の他覚的評価判定の一方法 —プラゾジンによるトライアル—

桧垣 進，中村 仁（八日市場国保）

今回，我々は“慢性うっ血性心不全における塩酸プラゾジンの効果”を京都大学三内科を中心とする多施設判定に参加する機会を得たので，その方法および結果について報告する。方法 symptom limited 多段階トレッドミルによる運動耐容検査を主に用い，不活性偽薬による単純盲検の投与中断を行ない長期投与の効果持続を検討した。結果と考察：偽薬による置換で肺活量，運動耐容時間，自覚症状の悪化が示され長期投与後にも薬効の持続が認められた。慢性効果を適当な対照をおいて評価判定する事が困難な点から，今回の偽薬投与前を対照として投与後の悪化の有無を判定したことは，false positiveの可能性が減少されていると考えられた。

24. Nicorandil の運動能及び血行動態に及ぼす効果

宇田毅彦，野田和男，関谷貞三郎
今関安雄，桧垣 進，中村 仁
（八日市場国保）

抗狭心症薬として新しく開発された Nicorandil を用い運動能に及ぼす効果を安静時血行動態に及ぼす効果について検討した。

(1) 運動能に及ぼす効果；対象は労作性狭心症6例で，β遮断剤との併用時，単独使用時の慢性効果，服用